

雑 録

三河開折高臺植物區系

小 泉 源 一

西南日本外帯の最東、赤石楔狀地の西、天龍川及び豊川の線を以て直に是と相接する日本中央アルプス木曾山脈は、南に低下して恵那山地となり、更に南に低下して二輪廻性の三河開折高地となる、三河開折高臺は主として、彼の有名なる領家變成岩を以て成り、段戸山地の出來山（一〇五二米突）を最高點となす。

玖摩關東大古山系の一部なる赤石山脈はイヌタムラサウを以て最も特色あるが如しと雖も、イヌタムラサウはアキノタムラサウ一型の畸形又は異形品なれば現今は植物區系地理上何等の價値を有せず、赤石楔狀地のフロラの特色は大河の河岸岩上にイハシヤジン、ウラハグサ、イハユキノシタ咲き、山地にエンシウシヤクナゲ、エンシウハグマ、スンシウヘウタンボク、ジングウツツヂ等を産するにあり、赤石楔狀地と相接して西南日本内帯の最東端木曾山脈はドウダン、シデコブシ、ハナカヘデ、ミヤマウメモトギ等の古型植物の殘存するを以て著しく、更に其西、美濃飛驒高原には、オケタンバ（マルバノキ、パンノキ）、ヒトツパタゴ、更に其西丹波高原に到ればヒウガミズキを以て最も特色となす。而して同じく、西南日本内帯の最東端たる三河開折高地が西南日本内帯たるの最大特色としては滿鮮要素たるホクチアザミを産するを以て知るべし、勿論ホクチアザミは豊川の東に散布すると雖も遙に東に到らず、是れ本植物分布生態の上より現今にては當然の事にして、此事實を以て西南日本内帯の特色要素たるを失ふものにあらず、四國の如きも本種は全く内帯のみに之を産す。

三河開折高地は日本暖帯南部にして海岸にはダンチク、オニススキ、ハギクサウ、ヒメユヅリハ、アシタバ、カクレミノ、ハマヒサカキ、モクコク、アゼトウナ等の暖地海濱分子を産し、海岸近くの低平なる濕洲地にはミクリガヤ、アンペラキ殊にナガハイシモチサウ、ミカハタスキモ等の珍らしき食虫植物を産せり、海岸より山地に入れば南方は六百米突、北方は五百六十米突位までは暖帯林にしてツブラジヒ、アラカシ、イチキガシ、ウラジロガシ、ツクバネガシ、アカカシ、クロカシ、タブノキ、を主林木とし是等と混生する林木はリンボク、カゴガシ、ヤブニツケイ、クスノキ、ホルトノキ、ヤマモガシ、ナナメノキ、カンザブラフノキ、クロバイ、モチ、クロ

ガネモチ、トキハカキ、バリバリノキ、ヤマモモ、タラエフ、サカキ等を最も著しき分子となす、此常緑潤葉樹林内に混生する落葉樹の主なるものは、ハゼ、ケンボナシ、アカメガシハ、チンヤノキ、カラスサンセウ、ゴンズイ、ネムノキ、ヤマハゼ、クマノミヅキ、コハモミジ等なり、林地の下木常緑灌木にはミヤマトベラ、ホソバジユズネノキ、ヒサカキ、アラキ、アリドホシ、ツバキ、シヤシヤボ、サネカヅラ、ネヅミモチ、フユイチゴ、カナメモチ、ソヨゴ、ツルシキミ、マンリヤウ、カラスシキミ、タイミンタチバナ、ルリミノキ、ナンテン、イハナンテン等にして落葉灌木にはサルマメ、キハギ、ムラサキシキブ、マルバウツギ、イヅセンリヤウ、イヌビハ、キジヨラン、タマアヂサキ、ヤマアヂサキ、ウメモトギ、ヤナギイチゴ、ナガホナツハゼ、ヒトツパハギ、ガンピ、バライチゴ等あり、蔓木にはテイカカヅラ、ムベ、オホツツラフチ、ツルグミ、カギカツラ、サカキカヅラ、ホウライカヅラ、ウラシロサルナシ、オホバウマノスズクサあり、喬木着生にはマメラン、ベニカヤラン、ムギラン、マツバラシ、フウラン、ベニシユスラン等あり、林下の下草にはヤマヂワウ、マルミヤマゴバウ、キチヂヤウサウ、ヤブカウジ、ヤマヂホトトギス、ヤブラン、サンセウサウ、キミヅ、ヤブメウガ、シロハナイナモリサウ、カキノハグサ、セキヤノアキチヤウジ等を著しき植物分子となす、羊齒類亦暖地生のもの多くウラシロ、コシダ、キヨシミヒメワラビ、ホソバカナワラビ、ナチクジヤク、イハヤナギシダ、カナワラビ、ヤノネシダ、アヲガネシダ、サヂラン、アヲネカヅラ、ヒトツパ、オホイタチシダ、オホキジノフ、コモチシダ、イハヒトデ、クルマシダ、ミヤマノコギリシダ、ウラボシノコギリシダ、タキミシダ、コバノイシカグマ、ホシダ、カタヒバ、イハヒバ等を最も著しき分子となす、針葉樹にして常緑潤葉樹林内に混するものはヒノキ、モミ、ツガの三種にして何れも多からず。

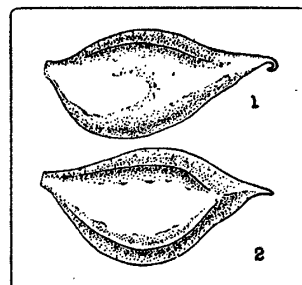
段戸山地に於ては六百米突にして、シヒ、カシの暖帯林は漸く終りを告げ上方に到るに従つてモミ、ツガの混交するもの漸く多く、カウヤマキ亦點生す、一層高地に到れば落葉樹はモミ、ツガよりも多くして大體に落葉樹林を成す、然もアセビ、シキミ、テイカカヅラ、ヒヒラギ、サカキ、ヒサカキ、ソヨゴ等の常緑灌木をも混じ暖帯の終りなるを示す、落葉喬木の主なる分子はナツツバキ、ヒメシヤラ、ブナ、イイギリ、カナクギノキ、イヌシデ、アカシデ、ヤマシバカヘデ、ミヅメ、クマシデ、アヲブキ、エゴノキ、ケヤキ、イヌブナ、ウラジロノキ、コハウチハ、メウリカヘデ、カウゾ、クヌギ等にして樹林下にはスズタケ密生す、スズタケは全く陽光を通さざる陰地に獨り平然として繁殖し林木の天然更新を全く阻害せり、是れ本邦の暖帯の終りに於ける落葉樹林の生態上大に注目すべき事なりとす。本帯の落葉灌木の主要なる要素はコ

ハクウンボク、アブラチヤン、サバダツ、コアヂサキ、ヤマアヂサキ、オホバクロモチ、オホバケクロモチ、ベニツクバネ、ガクウツギ、コムラサキ、ヤブムラサキ、シロモチ、コミネカヘデ、イモノキ、ツリバナ、クサギ、バイクワツツジ、ネヂキ、シラキ、フヂウツギ等なり、蔓本にはミツバアケビ、サルナシ、マツブサ、ツタウルシ、アマヅル、ゴトウヅル、等あり、草本にはテバコモミヂサウ、ツクシイハカガミ、イガホホヅキ、バイケイサウ、ホクチアザミ、ウスヒメワラビを著しき分子となす。

キツネノボタンとケキツネノボタン

大井次三郎

日本産の植物中凡そキツネノボタン程 Nomenclature の面倒なものは澤山はあるまい。此のキツネノボタンとケキツネノボタンとの學名については兎も角としてその両品の區別は、牧野博士が植物研究雜誌第七卷の歐文欄 31 頁にキツネノボタンは毛茸が比較的少い事が多い上に瘦果の先端の嘴部が鈎狀に曲ると指摘して居られる。此れによつてはつきりと區別が出来るのでその上に蛇足を加へるには及ばないが、腊葉で見ると瘦果の形にも可なりの相違點が認められる。挿圖の 1 はキツネノボタンの瘦果で全形は稍卵形をなしその上側には中肋に沿ふて一條の隆起が認められるが下側の縁邊には之がなく唯中肋があるだけである。之れに反してケキツネノボタンは挿圖の 2 にも見る様に全体が多少巾の広い倒卵形に近くなりその縁邊には上側にも下側にも各一條の隆起線があつてその断面は丁度六角形を極端に押しつぶした様になつて居り、その點ではむしろヲトコゼリヤシマキツネノボタンに似て來る。キツネノボタンは比較的北方に多く北海道南千島にもあるが、ケキツネノボタンはどちらかと云へば暖地を好み台灣では此植物しかないらしい。



1 キツネノボタン

2 ケキツネノボタン

莎草科植物雜記 4

大井次三郎

16) ホタルキとその近似品

ホタルキ及びその近似品は従來 C. B. CLARKE によつて世界で唯一種 *Scirpus erectus* POIR. のみとされて居たのであるが、私は久しい以前から此事について疑問があつ